

好循環する関係人口

(東京都神津島)

本誌編集部

「わーっしょい！ わーっしょい！」
盛大な掛け声が島に響き渡る。令和六年八月二日、神津島前浜地区にある物忌奈命神社いみなのみことの例祭に際し、平成二二年以来、一四年ぶりに「おとなみこし大人神輿」が催された。同行事が長年実施できていなかった要因は、担い手の不足が大きい。約三五〇キログラムの神輿をかつぎ、一日がかりで地区一帯を回るため、少なくとも八〇人以上の人手が必要である。今回、神津島漁協船主組合の呼びかけで再開。漁師だけでなく、島内他業種の若手や神津高校の生徒たちの参加、島出身者や島赴任経験者、離島留学の卒業生など三〇人以上が島外から来島し、総勢一八〇人となったため開

催することができたという。まさに「関係人口」が行事の復活を後押ししたといえるだろう。

本稿では、島で実践される関係人口醸成の取り組みについて紹介する。

デジタル技術を活用し関係人口創出

神津島村では、令和五年度より都のプロジェクト「東京宝島」による支援を活用し、「サステナブル・アイランド創造事業」に取り組んでいる。本事業は「観光振興」「地域交通整備」「農業活性化」「横断的DX推進」の四本の柱から成る、三力年事業である。神津島村、NTT東日本、ANAホールディングス関連二社（ANA NEO、ANA X）お

よびテレビ朝日の五者が連携し、本事業の観光分野に関する取り組みを進めている。

本年四月、「神津島村観光アプリ」「神津島メタバース」の二つのオンラインコンテンツがリリースされた。前者は、ANAグループ公式アプリ「ANA Pocket」内に設けられており、アクセス・宿・商店・天気など観光情報を見ることが出来る。また、GPSにより移動距離に応じたポイントが貯められる機能を活用し、赤崎遊歩道など島内の観光名所に行くとポイントが得られるデジタルスタンプラリーも実施している。後者は、「ANA GranWhale」内に神津島のメタバース（バーチャル空間）を設け、そこで天上山登山や星空観賞を疑似体験することができる。

「最初はゼロベースからのアプリ開発を考えたが、コスト面で断念した。既に多くのユーザーが使用しているアプリ内に作ったことで、島の認知度の向



神津島総務課・情報通信課長の
鈴木 敦氏。

上につながっている」と、本事業を進める神津島村の鈴木敦^{ちか}総務課・情報通信課長は話す。実際に「ANA Pocket」は約二〇〇万ダウンロードされており、そのトップページからアクセスできる「神津島村観光アプリ」は、リリースから既に二二万回以上閲覧されているという（八月二七日時点）。

また、同じく四月にはテレビ朝日の協力のもと「星空ツナガルコミュニティ」というファンクラブを立ち上げた。「国内外の星空好きや石垣島・西表島など他地域の星空保護区とつながりたい」との考えから、九月以降交

流イベントの開催を予定している。

本事業において、今後力を入れていく予定なのが集落の高台「よたね広場」でのコンテナハウスを用いた観光複合施設の建設だ。ワーケーションスペース、多目的室、災害用備蓄倉庫などの機能を有する。特筆すべきは、部屋五面が各四メートルのモニターで構成された「LEDルーム」で、天井から壁、床までの部屋全体に映像を投影することが可能である。鈴木課長によると「悪天候の時でも神津島の星空や海を見てもらうことができる。宇宙や海中に自分がいるような没入感が売り」とのこと。今回の「大人神輿」や同日開催の「かつお釣り行事」も三六〇度カメラで撮影しており、この部屋で観賞できるようにする予定だ。

このほか、同施設に



神津島観光アプリの画面。

はお菓子などを無人販売する「スマートストア」も設置される見込み。「島の商店は夜間閉まってしまいうから、コンビニが欲しかった。本当は酒の販売もしたかったけど、無人販売には酒税法での規制もあるし、皆芝生で飲んじやうから無理だね」と笑う。同施設は令和七年の完成、翌八年からの稼働を目指している。

「離島でオンラインやデジタルを活用した事業を行なう際、通信環境が隘路となることが多い。でも工事体制が整っているんで、神津島ではその心配はない。関係人口作りや既存の枠組みに

捉われない産業振興を進めることで、島の人口減少を食い止めたい」と、鈴木課長は抱負を語った。

新しい島内観光の萌芽

神津島は、令和四年よりアニメ『ラブライブ！ スーパースター!!』の《聖地》として、村営バスのラッピングや、神津島農業協同組合の島産パッションフルーツを利用したシロップ・ジャムとのコラボ商品など、同作のファンに向けた企画を随所で展開している。観光協会でも、作中に登場する舞台のマップなどを作成・配布。さらに神津島出身キャラクターの「特別住民票」など島でしか買えないオリジナルグッズの販売にも取り組んでいる。

「当初は、アニメで観光客を誘致することに心配の声もあったが、アクリルスタンドなどのグッズを手に記念撮影を楽しむファンがほとんどで、住民に迷惑をかけたという話は聞かない。ア



神津島観光協会事務局長の覺正恒彦氏。

ニメ好きの若い男性、夫婦、親子などこれまで島に接点がなかった人へもリーチできている。熱心なファンが友人を伴って来島することも多く、これを機に島を好きになってほしい」と、覺正恒彦^{しやうけいひこ}神津島観光協会事務局長は「アニメツーリズム」の効果について説明する。

なお、各種の企画を進めるにあたっては、村役場の観光課が意欲的だったことに加え、「ファンが記念に書けるノートを待合所に設置しては」など、版元のバンダイナムコによる提案・協力

も大きいという（島のアニメツーリズムについては本誌二七八号も参照）。

神津島は令和五年に環境省から「神津島エコツーリズム推進全体構想」の認定を受けた。これは、島内で星空ガイド・天上山登山などのエコツアーを営む「Full Earth」代表の古谷 亘^{わたる}さんを会長として、村、観光協会、ガイド団体、ダイビング協会、商工会、漁協、農協などの各団体が組織している「神津島エコツーリズム推進協議会」がエコツーリズム推進法に基づき国へ提出した構想で、島の自然や文化の観光活用とその保全に主眼を置いたものである。「自然や文化は、もともと島で大切にしてきたもので、取り組み内容については、これまでから大きな変化はない。ただ、島外の人に対してより明確な根拠を持って、自然・文化の保全を呼びかけられるようになった点は大きい。私が島に移住してからの一〇年間だけをみても、伝統や歴史の失伝

がみられた。こういった文化の消失を食い止めることにもつながるのでは」と、覺正事務局長は期待を述べる。

神津島では、現在目立ったオーバーツーリズムは起こっていないが、村営のキャンプ場二カ所（沢尻野営場と長浜野営場）がゴミの放置や夜間の騒音の問題から、二〇一九年をもって閉鎖になった過去がある。覺正事務局長によると、観光業において、現在の一番の課題は担い手不足だという。

「星空ガイドは住民五〇人以上が認定されているが、実働は私を含めて七、八人ほど。宿も保健所に登録されているのは五〇件以上だが、稼働できているのはその約半分。島の高齢化も進んでおり、後継者を育てるには、島外から人材に来てもらわないといけない」

着実に成果を上げている離島留学

島内唯一の高校である東京都立神津高等学校。かつては生徒数一二〇人余

を数えていた同校だが、人口減少や島外への進学により、一時は生徒数が二〇数名まで減少した。同校では、学校の存続と学力向上、ひいては村全体の活性化を目指し、平成二八年度より離島留学を開始している（詳細は本誌二四八号参照）。本年度で九期目を迎えた現況を、神津島村教育委員会の清水一正かずまさ教育長に伺った。

開始当初は、島内の家庭にホームステイする形で留学生を受け入れていた。



離島留学生が暮らす「しらすな寮」。

その後、学生寮「しらすな寮」を整備（平成二九年に男子寮、三一年に女子寮が完成）し、現在の留学生は寮生活を送っている。寮の定員は一四名（男子八名、女子六名）で、今年度は一三名が利用。生活費（家賃や食費、光熱費など）を含んだ経費として月に一〇・五万円がかかるが、うち六・五万円を都と村で支援している。

留学生に神津高校を志望した理由について聞くと、「小さい頃に神津島に遊びにきたことがあった」「星空や海などの豊かな自然に惹かれた」「親元から離れての寮生活で自立したい」などの答えが挙がる。学校生活での授業、校内行事、部活動に留まらず、星空ガイド養成講座や吹奏楽団など、各自の関心に応じた地域コミュニティへの参加もみられるという。島の住民からも「挨拶もしっかりしてくれる」など離島留学生に対する好意的な意見が多い。

「離島留学生は大学進学率が高く、彼



神輿をかつぐ若者たち。

らから刺激を受け、地元出身の生徒の学力も上がっている。そのため、地元から神津高校への進学率向上にもつながる」と、清水教育長は話す。

着実に実績を上げていく神津高校の離島留学は非常に人気が高く、本年七月に実施した学校説明会・寮見学会に

は、想定を大きく上まわる応募があった。しかし、寮の定員のみならず、留学生をケアするための受け入れ側の人員体制など、ソフト面で課題があり定員を現状から増やすことは難しい。

離島留学の卒業生が、島に移住した事例はまだないが、長期休暇の折にアルバイトや遊びに来島したり、島の成人式に参加するなど、関係は続いている。「離島留学生にとって島が第二、第三のふるさとなれば。本土にいても『島のためにできることがあれば協力したい』と言ってくれる卒業生もいる。グローバルな時代なので、国内外から神津島について発信してくれるようになる」と嬉しい。離島留学生在が一生懸命に島の行事にとりくむ姿勢を見て、島の良さを再認識した住民も多い。神津高校の生徒たちが島の子どもたちの手本になっている」と、清水教育長は語った。



今回島を訪れて印象的だったのは、離島留学の卒業生や観光客の方々が、単なるリピーターになるのではなく、親類や友人などをともなって再び島に遊びに来ている様子を見たことだ。このように〈関係人口〉の好循環とは、指数関数的に島とつながりを持つ人が増えていくことなのかもしれない。もちろん、神津島のように人に紹介したくなるほど、その地域に魅力があることが必要条件と言える。

島の年配の方は、「大人神輿が見られるのもこれが最後かもしれない」と、感慨深げに語っておられた。人口減少や少子高齢化で、行事の継続は簡単ではないが、近い将来、再び神輿の賑わいが見られるよう、今後も神津島での取り組みを注視していくとともに、筆者自身も関係人口となり、島との関わりを持ち続けていきたい。

（文・石川／写真・小原佐和子）

（本号巻頭グラビアもあわせてお読みください）